

出展者

小幡正雄 / OBATA Masao

小原美鶴 / OHARA Mitsuru

似里力 / NISATO Chikara

西澤彰 / NISHIZAWA Akira

秦野良夫 / HATANO Yoshio

三原巖 / MIHARA Iwao

森川大輔 / MORIKAWA Daisuke

本展

会場：京都市美術館別館 1 階 第 1 展示室

住所：〒606-8342 京都府京都市左京区岡崎最勝寺町 13

会期：2022 年 12 月 15 日（木）～2022 年 12 月 25 日（日）※月曜休館

時間：10:00-18:00（※最終日は 16:00 まで）

料金：無料

巡回展

会場：市民交流プラザふくちやま 3 階 市民交流スペース+ギャラリースペース

住所：〒620-0045 京都府福知山市駅前町 400

会期：2023 年 3 月 1 日（水）-3 月 5 日（日）

時間：10:00-18:00（3 月 1 日（水）は 13:00 から、3 月 5 日（日）は 17:00 まで）

料金：無料

主催

きょうと障害者文化芸術推進機構（事務局：京都府健康福祉部障害者支援課）

協力

協力：社会福祉法人くすのき会、社会福祉法人みずなぎ学園、社会福祉法人光

林会、社会福祉法人館邑会、もうひとつの美術館、社会福祉法人かんな会、三

原巖原画を観る会実行委員会、社会福祉法人松花苑（順不同）

展覧会企画：art space co-jin

キュレーション：寺岡海（art space co-jin）

会場構成：dot architects、tamari architects

広報デザイン：タナカタツヤ

お問い合わせ

art space co-jin

art space co-jin（きょうと障害者文化芸術推進機構 事務局）

〒602-0853 京都市上京区河原町通荒神口上ル宮垣町 83 レ・フレール 1 階

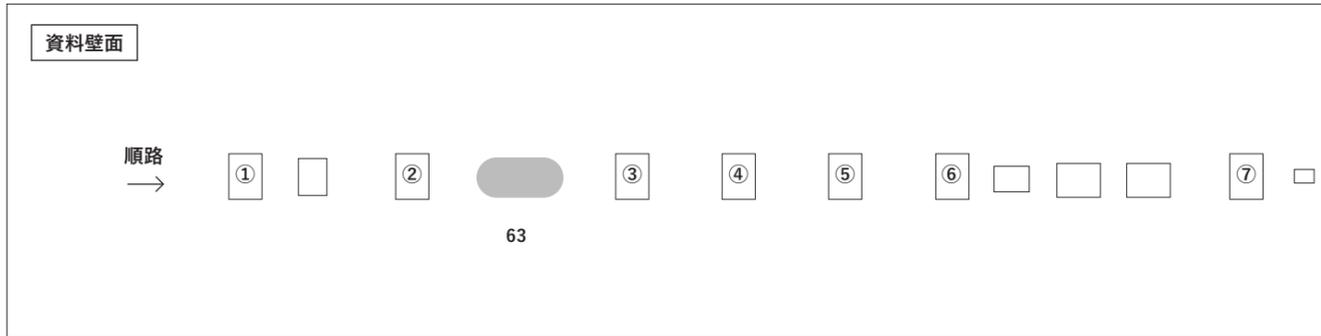
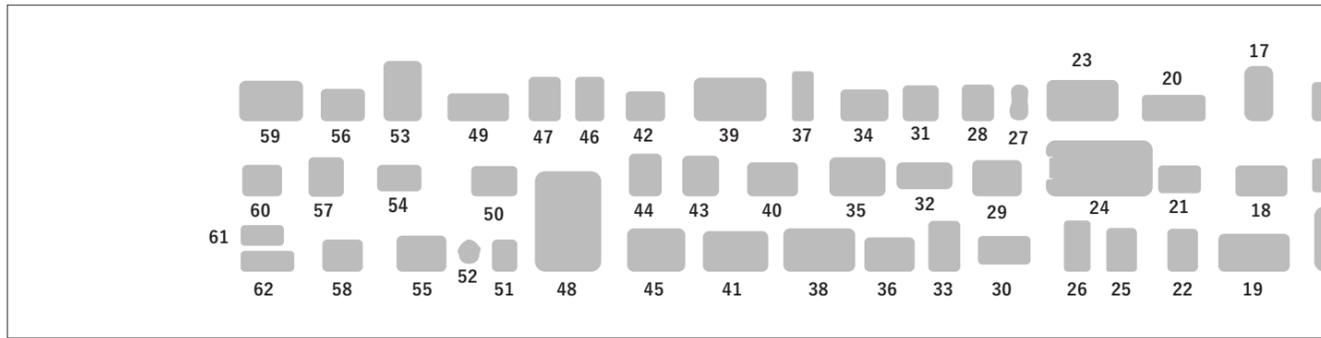
Tel & Fax: 050-1110-7655

Mail: info@co-jin.jp | WEB: https://co-jin.jp/

2022 The Symbiosis Art Festival

2022年度
共生の芸術祭

わたしは
メモリー
I am
a Memory



小幡正雄

OBATA Masao

1943 年生まれ、2010 年没。兵庫県。

1943 年 11 月 11 日に生まれた小幡正雄は、66 歳でこの世を去った。

中学 1 年生の時、両親の離婚を期に母と共に瀬戸内海の小さな島へ移り住み、物静かで消極的だった転校生は、のちに赤い服を全身に纏い、赤鉛筆で赤い絵を描く日々をおくった。そして、それらの絵は国内外の展覧会で注目を浴びることになった。抗えない苦労を重ねたであろう彼の人生は、40 代半ばにひふみ園へ入所したところから風向きが変わっていった。厨房から野菜のシミがついた生臭いダンボールを拾ってきては自室に溜め込み、そのダンボールに絵を描き始めたのだ。描き始めたであろう頃から 3 年がたった時、美術家・東山嘉事氏に絵を見初められ、それまで焼却処分されていた絵は作品として保管されるようになった。その 3 年後には、当時兵庫県立近代美術館学芸員だった服部正氏に取り上げられ「アート・ナウ 98：ほとばしる表現力－アウトサイダー・アートの一断面」にて作品が紹介された。そしてその後、瞬く間に日本を代表するアウトサイダー / アール・ブリュットの作家として国内外の展覧会で作品が紹介されることとなった。

2010 年 66 歳の没後、彼の物語はそこで終わらなかった。1000 点以上もの遺作が行き場をなくし残され、それらを調査、整理し所有者を確定させるプロジェクトが始まったからである。身寄りのない彼の作品の身寄りを探すそのプロジェクトの調査記録は服部正氏により「小幡正雄の遺作について」（『国立新美術館研究紀要』第 5 号、2018 年）と題しまとめられた。

作品壁面

OB-01 《結婚式》制作年不明 | 色鉛筆、段ボール

OB-02 《無題（男）》制作年不明 | 色鉛筆、段ボール

OB-03 《無題（ピアノのある家）》制作年不明 | 色鉛筆、段ボール

OB-04 《無題（魚類）》制作年不明 | 色鉛筆、段ボール

OB-05 《無題（地図）》制作年不明 | 色鉛筆、段ボール

OB-06 《無題（男女）》制作年不明 | 色鉛筆、段ボール

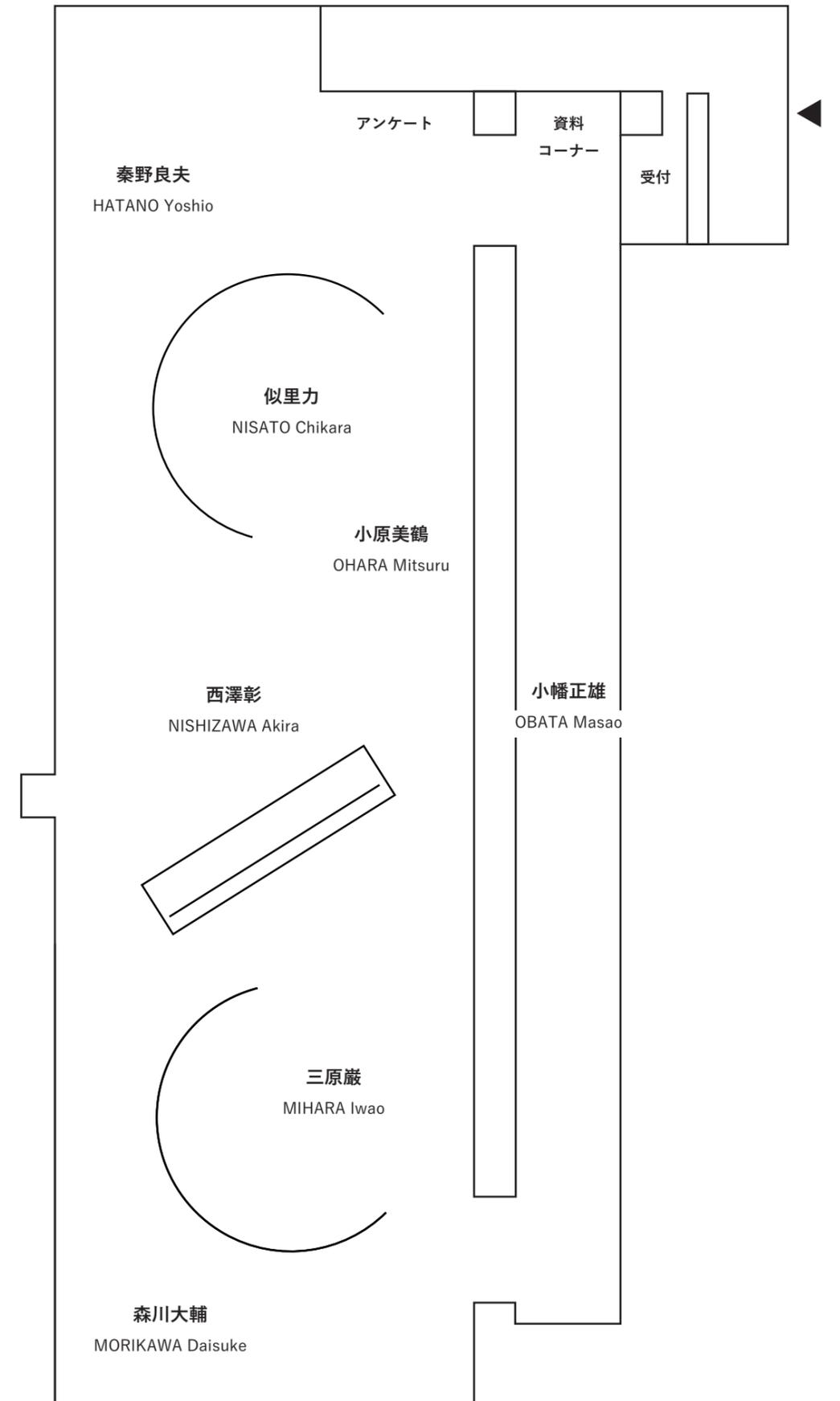
OB-07 《無題（船）》制作年不明 | 色鉛筆、段ボール

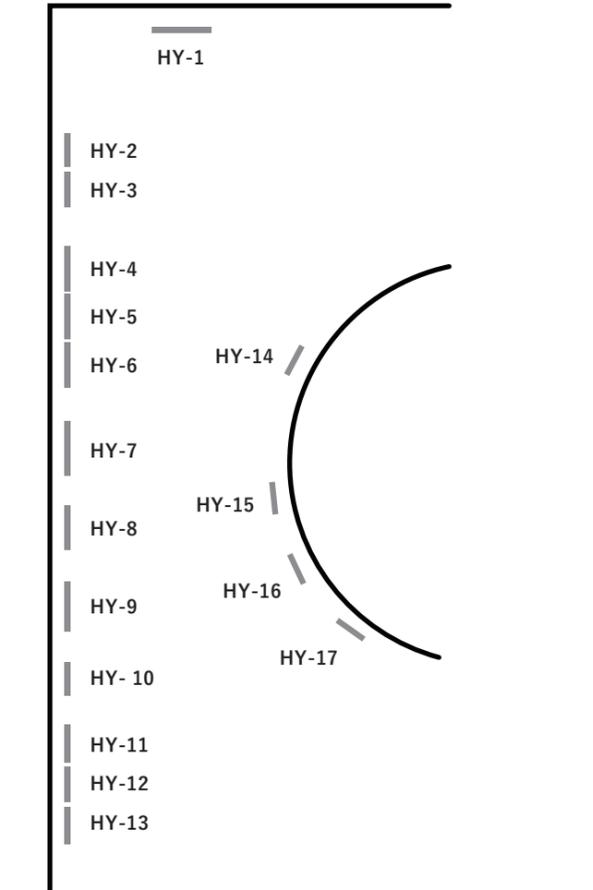
OB-08 《無題（女）》制作年不明 | 色鉛筆、段ボール

OB-09 《無題（風景）》制作年不明 | 色鉛筆、段ボール

OB-10 《無題（男）》制作年不明 | 色鉛筆、段ボール

OB-11 《男》制作年不明 | 色鉛筆、段ボール





HY-1 《**タイトル不明**》制作年不明 | 色鉛筆、鉛筆、紙

HY-2 《**タイトル不明**》制作年不明 | 色鉛筆、鉛筆、紙

HY-3 《**タイトル不明**》2005 | 色鉛筆、鉛筆、紙

HY-4 《**タイトル不明**》2002 | 色鉛筆、鉛筆、紙

HY-5 《**タイトル不明**》2001 | 色鉛筆、鉛筆、紙

HY-6 《**風景（思い出）**》制作年不明 | 色鉛筆、鉛筆、紙

HY-7 《**タイトル不明**》2001 | 鉛筆、紙

HY-8 《**タイトル不明**》制作年不明 | 色鉛筆、鉛筆、紙

HY-9 《**タイトル不明**》制作年不明 | 水彩、鉛筆、紙

HY-10 《**室内2（菱形もよう）**》制作年不明 | 鉛筆、紙

HY-11 《**タイトル不明**》2002 | 色鉛筆、鉛筆、紙

HY-12 《**タイトル不明**》2002 | 色鉛筆、鉛筆、紙

HY-13 《**タイトル不明**》制作年不明 | 色鉛筆、鉛筆、紙

HY-14 《**見えない記憶**》制作年不明 | 鉛筆、紙

HY-15 《**タイトル不明**》制作年不明 | 色鉛筆、鉛筆、紙

HY-16 《**タイトル不明**》2003 | 色鉛筆、鉛筆、紙

HY-17 《**タイトル不明**》2002 | 色鉛筆、鉛筆、紙

泰野良夫

HATANO Yoshio

1935年生まれ、2007年没。群馬県。

一見すると平凡な室内や屋外の景色だが、よく見ると壺や家具、電柱の傍らに、どこかで見たことがあるような、しかし使い道がわからない道具がある。また画面の中には見上げる視点と見下ろす視点という風に、複数の視点が混在している。

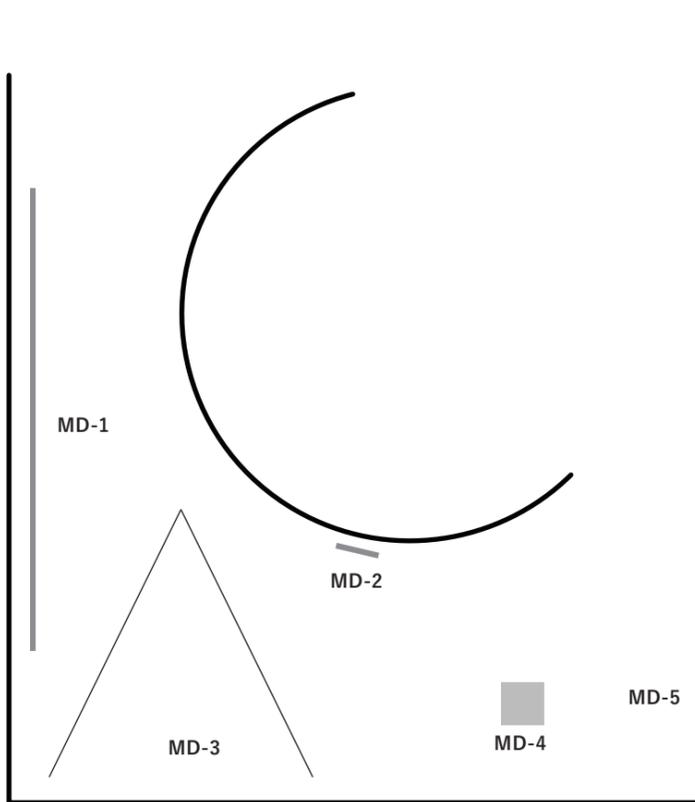
この不思議な絵の作者である泰野良夫は、1999年、65歳の時にかんなの里へ移ってきた。以前の施設でも絵を描いていたため、アート工房班に所属して活動を続けた。そこで描かれたのがこの一連の絵だ。画用紙を受け取ると自発的に描き始めたという。

泰野には発話がなく、はじめは何を描いているのか誰もわからなかった。2001年に施設内の展示で初めて泰野の絵が飾られた際、彼の兄が「コレは私たちが昔住んでいた家にそっくりだ^[1]」と言ったことで、思い出の景色だと判明した。

農家だった彼の実家には、農耕具や養蚕道具のほか、兄が購入した蓄音器やテレビなど、当時の最新機器が揃っていたという。本人亡き今、確証を得ることは難しいが、不思議な道具たちも、想像の産物ではなく家の中にあったモノを描いていたのだろう。

穏やかだが、几帳面でこだわりの強さも持ち合わせていた。直線を引く際は空き箱の一边に鉛筆を添えて引いた。1枚の絵が完成するまでに半日ほどかかるが、気に入らないと破り捨てることもあったという。晩年は入退院を繰り返すようになり制作の数は減ったものの、調子がいい時はベッドの上でも絵を描いていた。作品自体への執着は薄く、完成したものは看護師に渡してしまったそうだ。

繰り返し描き思い出を反芻することが、作品として残すことよりもずっと大切な行為だったのだろう。



MD-1 上段（右から）

《**タイトル不明**》2022

《**タイトル不明**》2019（額装内上）

《**タイトル不明**》2020（額装内下）

《**タイトル不明**》2022

《**タイトル不明**》2022

《**タイトル不明**》2019

《**タイトル不明**》2019

下段（右から）

《**タイトル不明**》2019

《**タイトル不明**》2019

《**タイトル不明**》2019

《**ラビユタ**》2019

《**タイトル不明**》2022

《**タイトル不明**》2020

《**タイトル不明**》2019（額装内上）

《**タイトル不明**》2019（額装内下）

《**タイトル不明**》2022

《**タイトル不明**》2020

素材：オイルパステル、アクリル絵具、色鉛筆、紙

MD-2 **森川大輔** **資料写真**

2022年8月26日、みずのきにて

撮影：art space co-jin

MD-3 **森川大輔** **資料映像**

6分40秒

出演：森川大輔、森太三（美術作家）

取材日時：2022年8月26日、10月21日

協力：社会福祉法人松花苑 みずのき

撮影・編集：art space co-jin

協力：社会福祉法人松花苑

MD-4 **森川大輔** **作品資料**

MD-5 **木片**

森川大輔

MORIKAWA Daisuke

1987年生まれ。京都府在住。

所属：社会福祉法人松花苑 みずのき

森川大輔は10年以上、毎週一度のアトリエ活動に通っている。

そこで画用紙やスケッチブックにオイルパステルや水彩、アクリル絵具などを使用し平面作品を制作している。モチーフはアトリエに置いてある図鑑や「モノタロウ」のような業務用品のカタログ、旅行パンフレット、また自身が撮影した写真などから選ぶ。虫や生き物、長靴、農業用のシート、海岸や虹の風景などを描いた作品が1回の活動（約80分）で3〜4枚ほど仕上がる。

作画の他に、パレットに残った絵の具でアトリエ内にある棚や備品にも着色することがあり、施設敷地内にある石垣や職員の水の車のマフラーにまで施すこともあったが、さすがにそれらは望ましい行為ではないので控えてもらうことになる。その代わりに許容されたのが、木片や欄干への着色であった。

木片は美術作家でもあるアトリエ講師の森太三氏が持ち込んだ不要になった角材などの切れ端である。本来であれば廃棄されてしまうだけの木片に、ここで新たな役割が与えられることになる。

欄干は敷地内に昔からある橋で、広場と棟の水無川の上に10mほどの長さで架かっている。森川はそこに残った絵の具でサビ止めを施すようにペイントする。めくれた塗膜を手で払い落としたり、絡みついた雑草を取り除いたりして欄干の維持保全をするその姿からは、愛着と責任感さえ感じられる。

机上での描画から身近なものへの着色までの一連の行為がルーティンとなっており、日常の景色へ溶け込んでいく。欄干は長年の塗料の集積により新しい層に覆われていく一方で、風化して剥がれてもいく。色彩の浸透と劣化、さらに周囲の人の許容による均衡がもたらす眺望がここにある。

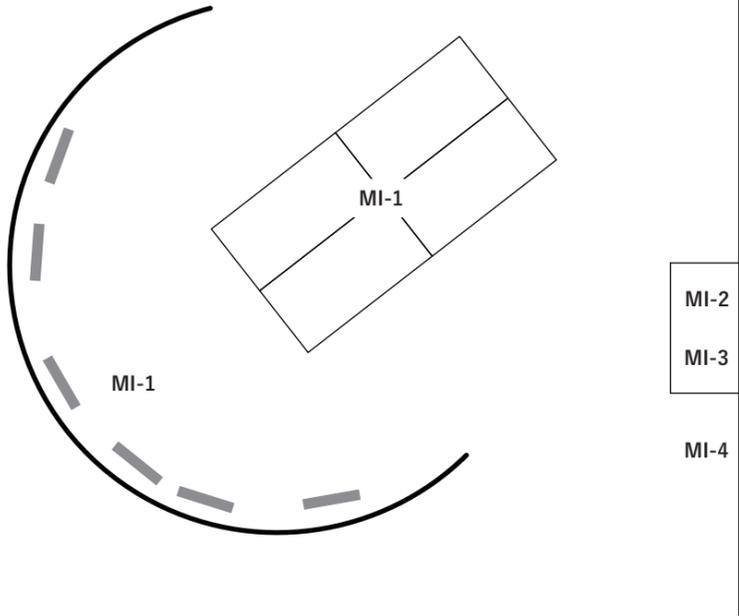
[1] はたよしこ「ギャラリー 泰野良夫」『さぼーと』583号 3p 日本知的障害者福祉協会 2005年

MI-1 すべて《タイトル不明》
色鉛筆、鉛筆、フェルトペン、ボールペン、紙

MI-2 三原巖 展示資料
新聞切り抜き
三原は戦争に関する新聞記事を集め、講演の際に使用していた

MI-3 三原巖 展示資料
8mm フィルム

MI-4 三原巖 展示資料
23 分 32 秒
三原巖の撮影した 8mm フィルムを
デジタルデータ化



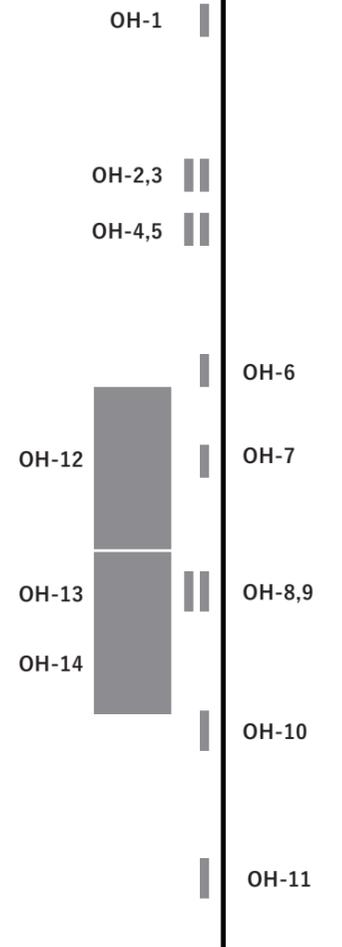
三原巖

MIHARA Iwao

1932 年生まれ、2021 年没。京都府。

1932 年に生まれた三原巖は、聴覚障害があったために目で見たいものを記憶することが得意だったという。大阪にて育ち、そこでの空襲の体験は三原の心に強く残ったようだ。成人後は製本の仕事に従事し、ろう者のための社会運動にも精を出した。若い頃から絵に親しみ、ろうあ協会の会報誌に絵と詩を掲載していたという。2001 年前後、会社を退職後に自身の記憶をもとにした絵の制作を始めた。色鉛筆にて細部まで細かく描き込まれた絵に手書きの説明文が書かれた紙が添えられている。第二次世界大戦中の描写が多くあり、まだ平和だった開戦初期の日常生活を描いたものもあれば、大阪大空襲の実体験を生々しく伝えるものもある。描くだけでなくこれらの絵を持って様々な場所に赴き、体験を語り継ぐ活動を行っていた。講演に呼ばれた際はテーマがそうであったためか、話すのはほとんどが戦争にまつわる話だったが、残されている絵は戦後の人生を描いたものも多い。仕事のこと、住まいのこと、趣味や旅行などについて生き生きと描いている。趣味としてカメラ、特に SL の撮影には凝っていたようで、しばしば得意げにカメラを構える自分自身の姿を描いている。2 歳頃の天井に吊り下げられていた飾りの記憶から始まり、平成に入ってから自身の暮らすニュータウンの風景で終わっている三原の一連の作品は、戦時中の実体験の貴重な記録としてだけでなく、昭和初期に生まれ、時代を生きた一人のろう者のライフヒストリーとしても興味深い。

OH-1 《タイトル不明》 2020 | 糸、布
OH-2 《タイトル不明》 2022 | 糸、布
OH-3 《タイトル不明》 2021 | 糸、布
OH-4 《タイトル不明》 2022 | 糸、布
OH-5 《タイトル不明》 2017 | 糸、布
OH-6 《タイトル不明》 2020 | 糸、布
OH-7 《タイトル不明》 2021 | 糸、布
OH-8 《タイトル不明》 2019 | 糸、布
OH-9 《タイトル不明》 2020 | 糸、布
OH-10 《タイトル不明》 2019 | 糸、布
OH-11 《タイトル不明》 2021 | 糸、布
OH-12 《タイトル不明》 2022 | 糸、布
OH-13 《みずなぎ鹿原学園 授産製品（カバン）》 2022 | 糸、布
OH-14 《みずなぎ鹿原学園 授産製品（ブローチ）》 制作年不明 | 糸、布



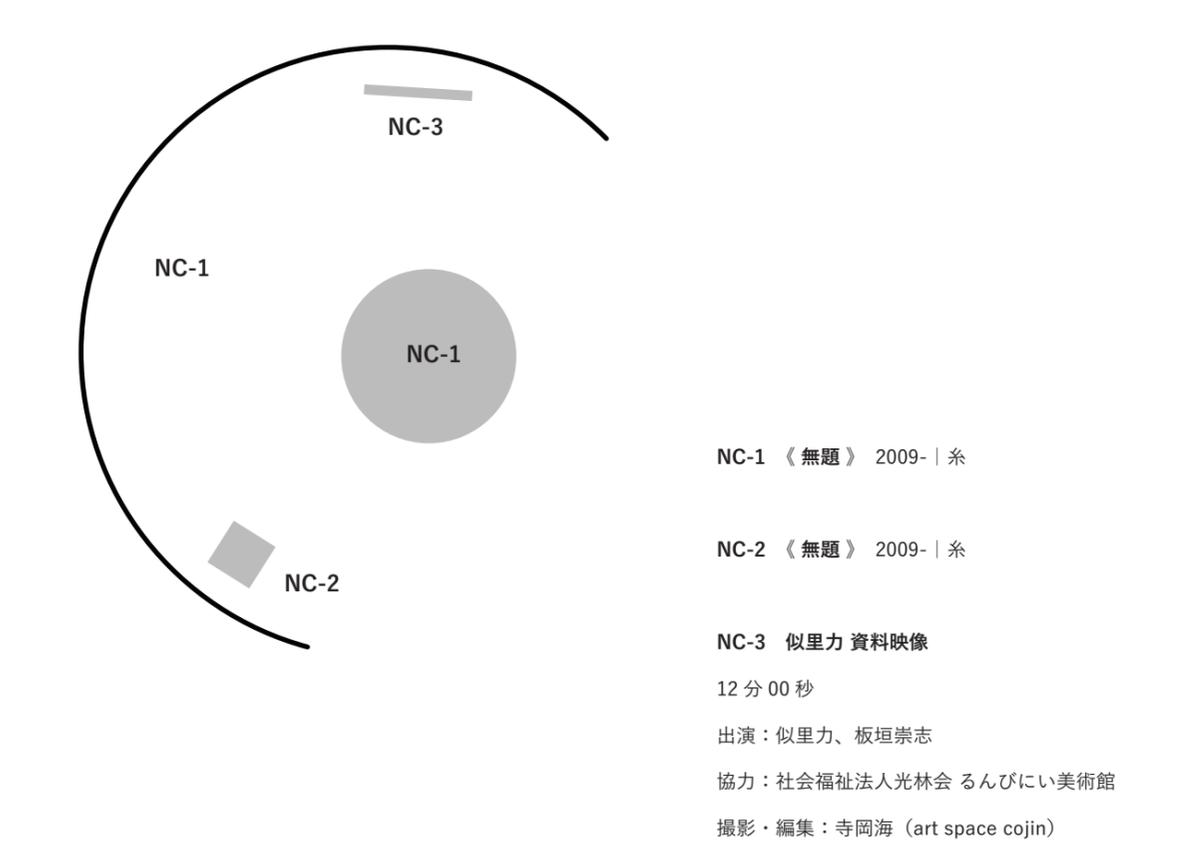
小原美鶴

OHARA Mitsuru

1949 年生まれ。京都府在住。

所属：社会福祉法人みずなぎ学園みずなぎ鹿原学園

短くなった糸も大切に使い、ひと針、またひと針と丁寧に完成へと向かう。小原美鶴の刺繍作品は、完成ののちにみずなぎ鹿原学園の授産品を取り扱うブランド“nu-tan”の製品としてブローチやバックなどとして姿を変える。幼少期から針仕事が好きだったと話す彼女は、50 代半ばからみずなぎ鹿原学園に通いはじめ、以後 17 年間、朝から夕方まで、学園で過ごすほとんどの時間を刺繍の制作に充ててきた。それほどまでに夢中になれる刺繍制作の魅力について尋ねると、彼女は照れながら「針が布をスーッと通ると嬉しくなる」と身振りを交えて答えた。彼女の制作は、自ら糸を購入するところから始まり、その時々好きな色を選ぶ。仲の良い友達と糸の交換をすることもあるそうだ。作品の中に散りばめられているのは、可愛らしい動物たち、ハートやお花など、彼女の好きなものばかりだ。制作を進めていくうえで、なにを登場させようか、どんな作品にしようかと悩むことはなく、ただ好きなものを順番に、朗らかに形にしていく。その間に、針は幾度となく布を行き来し、度々に生まれ続ける喜びを、彼女は存分に受け止め、歌といっしょにコミカルなダンスを踊り、周りにいる人たちを笑わせている。そうして、小さなもので 1 ヶ月弱、大きなもので 3 ヶ月もの時間が費やされ、刺繍作品は完成する。完成した作品は、「おもしろいのができた」と喜ぶ彼女の手元から巣立ち、姿を変えて製品となり、店頭に並び、誰かの目にとまり、誰かのもとへととどり着き、その誰かの日常を明るく彩ることとなる。その旅立ちが一番嬉しいと、彼女はにこやかに話した。



似里力

NISATO Chikara

1968年10月20日生まれ。岩手県在住。所属：社会福祉法人光林会 るんびにい美術館

1968年生まれ。岩手県在住。

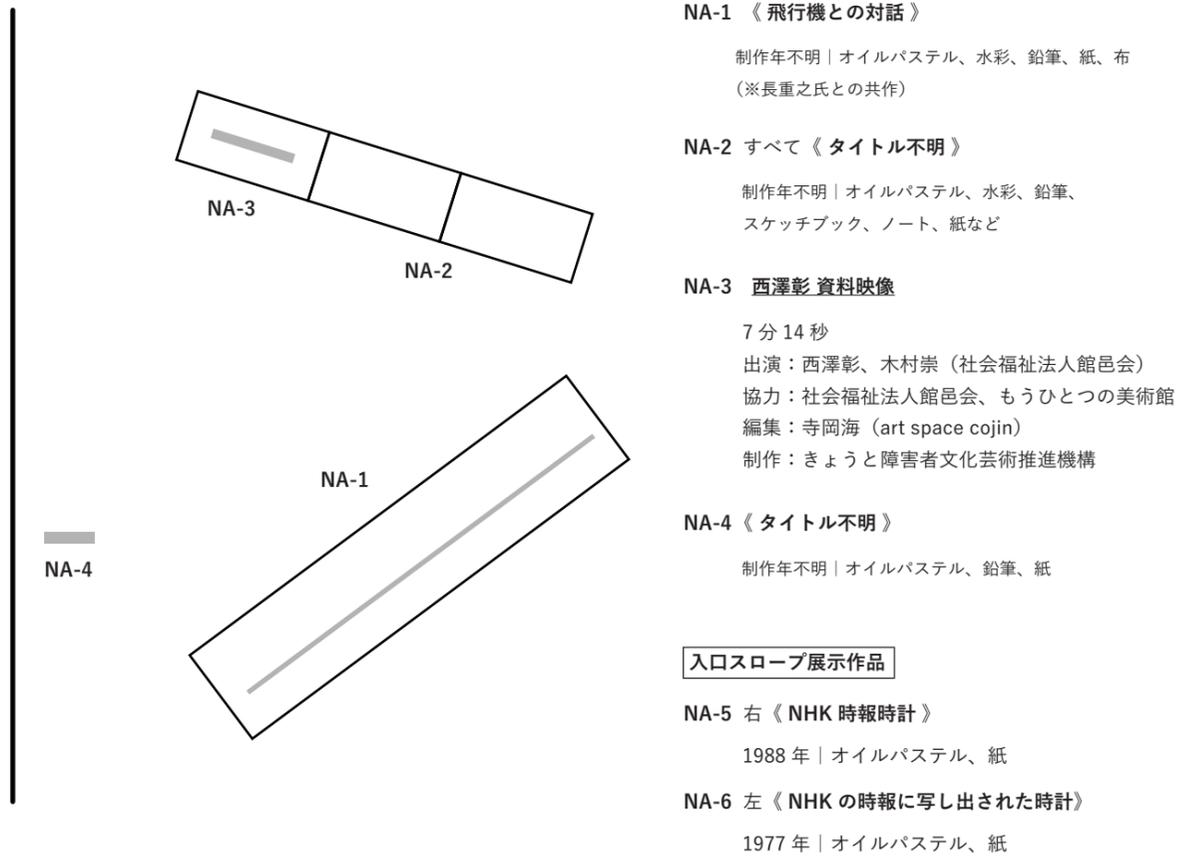
所属：社会福祉法人光林会 るんびにい美術館

岩手県で生まれ育った似里力は、花巻市にある、るんびにい美術館内の「アトリエまゆ〜ら」に通っている。当初、似里は施設内で草木染めの製品を製造する仕事のうち糸を巻き取る作業を担当しており、糸が絡まった際はやむを得ず糸を切って結び、作業を進めていた。しかし、いつしか支援員の目を盗んで自ら糸を切って結ぶようになり、いくら注意してもその行為をやめることがなかったため、施設の了承の下、2009年ごろから糸を結び連ねてゆく糸玉の制作に没頭するようになった。

似里が「いとっこ（※1）」と呼ぶこの行為は、5mmほどの間隔で結ばれた糸を日々生み出していく。弱視である彼は、目から数センチのところまで糸を近づけて切って結ぶ。（黒いテーブルは糸を識別しやすいようにと自身が選んで購入したものである。）、そうしてある時、その行為は終わりを迎え、糸玉は完成する。当初は1年ほどの期間を費やしていたが、近年は制作工程を工夫することで約3ヶ月に一つのペースで生み出され、現在では30数個ほどの糸玉が存在している。作り終えた糸玉にはさほど関心はもたず、あくまで「糸を切って結ぶ」というその行為に歓びを見出しているようであり、時には制作した糸玉をプレゼントすることもあるという。

似里の行為に終わりはない。日々、糸を切って、結ぶ。糸玉が出来上がれば、また次の糸を結んでいく。繰り返される日常の中で彼の歓びと共に結ばれた糸玉は、まるで似里の生きる時間そのもののようでもある。

※1) 東北地方の方言で、名詞の後ろに「〜っこ」を接続することで愛着を持った表現となる



西澤彰

NISHIZAWA Akira

1969年10月20日生まれ。群馬県在住。所属：社会福祉法人館邑会 陽光園

1969年生まれ。群馬県在住。所属：社会福祉法人館邑会 陽光園

群馬県館林市にあった今はなき飛行場（※1）の側で生まれた西澤彰は、幼い頃から飛行機が飛び立つ様子を眺めながら育ち、次第に記憶の中にある飛行機の風景を描き始めるようになった。

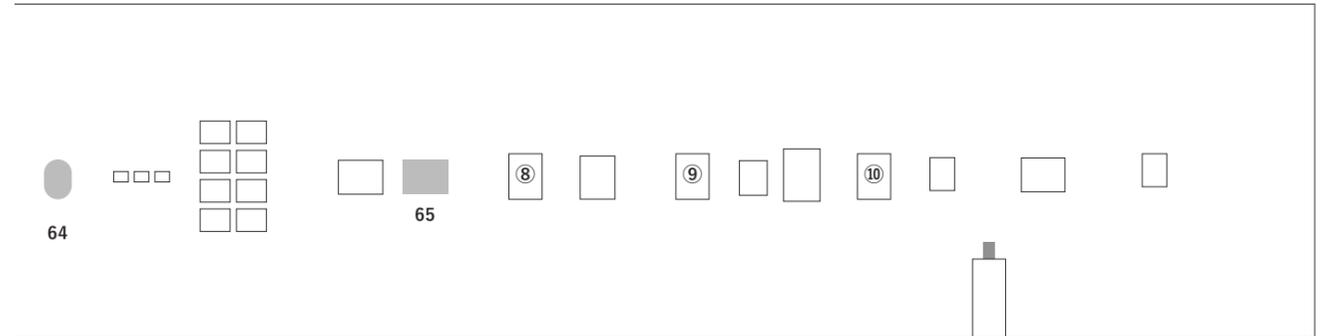
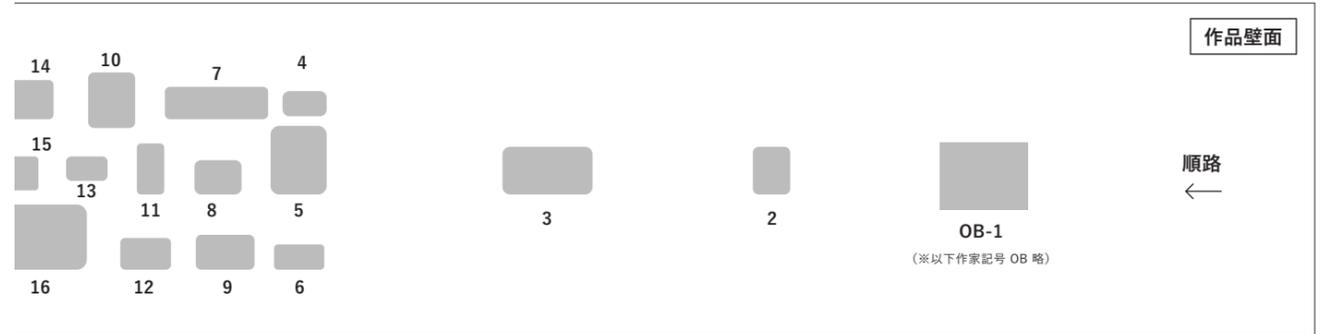
絵には、飛行機の胴体に描かれたロゴや、その時々々の飛行機の影までも克明に描かれており、西澤の記憶力の高さが窺える。また、大きく余白を残した構図は、彼が飛行機を見上げたその時の臨場感を感じさせてくれることだろう。

モチーフとして飛行機が描かれることが多いが、その他にも電車や車、電柱なども描くこともあり、中にはテレビに映るNHKの時報を描いたものもある。本展出品作の「NHKに写し出された時計（1977）」と「NHK時報時計（1988）」の2点は、制作年こそ11年の間があるが、どちらも19時の5秒前を指しており、飛行機の作品と同様に流れる時間の一瞬を正確に捉えていたことが推測される。また、幼いころから美術家である長重之（ちょうしげゆき）氏（1935-2019）と交流があり、長氏の作品の素材として扱われることの多かった帆布に、西澤の作品195点を貼り付けた「飛行機との対話」と題された作品も本展覧会では展示している。展示作品の中には、幼少期の西澤の作品を見て長氏が綴った言葉が書き込まれたものもあり、2人の出会いに思いを馳せていただければ幸いである。

西澤の作品は、現在膨大な数になっている。今では彼の暮らす施設からは間近に飛行機を見ることはできなくなったが、彼は今も変わらずに記憶の中を行き交う飛行機を眺めているのだろう。

※1) 大西飛行場

日本陸軍の飛行場として使用されていた館林陸軍飛行場を終戦後、1964年に飛行機愛好家である大西勇一氏が個人飛行場として開設し、個人飛行場として運用していた日本の中でも珍しい飛行場。2004年に閉鎖。現在はその姿は残っていない。

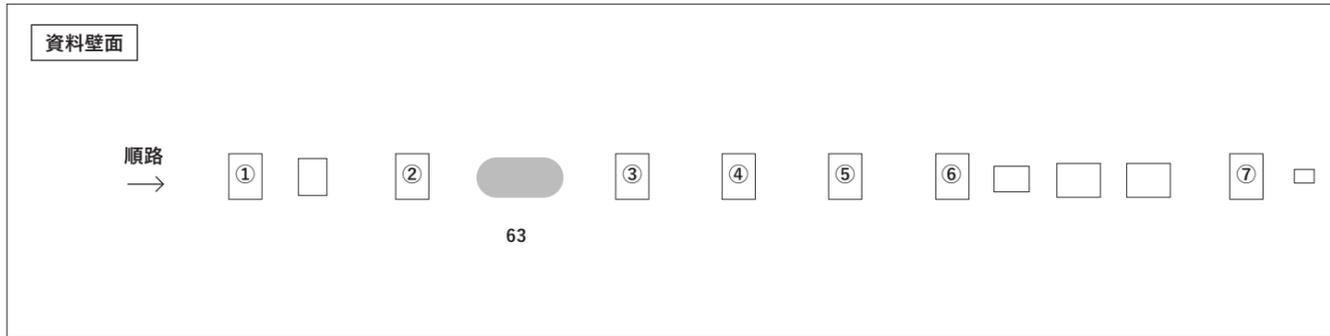
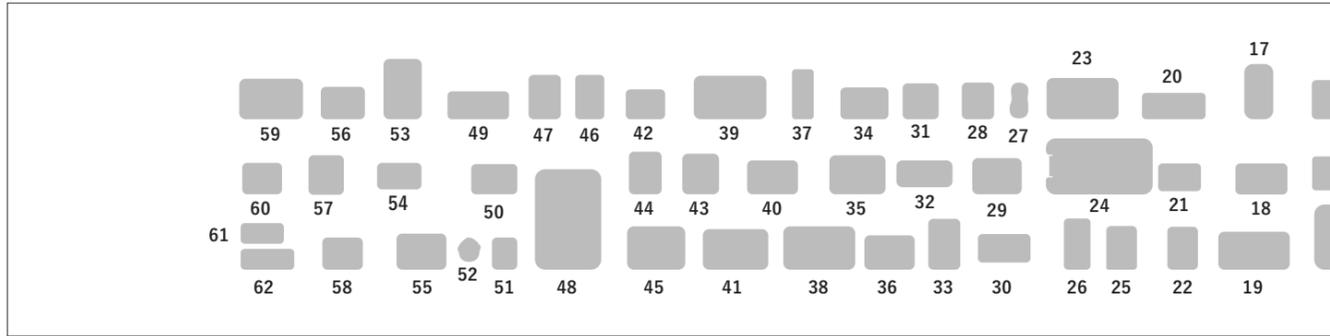


- OB-12 《結婚式》制作年不明 | 色鉛筆、段ボール
- OB-13 《結婚式》制作年不明 | 色鉛筆、段ボール
- OB-14 《無題 (パーベル?)》制作年不明 | 色鉛筆、段ボール
- OB-15 《無題 (家族)》制作年不明 | 色鉛筆、段ボール
- OB-16 《東京タワー》制作年不明 | 色鉛筆、段ボール
- OB-17 《無題 (男)》制作年不明 | 色鉛筆、段ボール
- OB-18 《無題 (動物の親子)》制作年不明 | 色鉛筆、段ボール
- OB-19 《ミサイル》制作年不明 | 色鉛筆、段ボール
- OB-20 《ラケット》制作年不明 | 色鉛筆、段ボール
- OB-21 《茶わん 角ざら》制作年不明 | 色鉛筆、段ボール
- OB-22 《無題 (男)》制作年不明 | 色鉛筆、段ボール
- OB-23 《無題 (船)》制作年不明 | 色鉛筆、段ボール
- OB-24 《無題 (建造物)》制作年不明 | 色鉛筆、段ボール
- OB-25 《無題 (男)》制作年不明 | 色鉛筆、段ボール
- OB-26 《無題 (男)》制作年不明 | 色鉛筆、段ボール
- OB-27 《無題 (男)》制作年不明 | 色鉛筆、段ボール
- OB-28 《無題 (男)》制作年不明 | 色鉛筆、段ボール
- OB-29 《結婚式》制作年不明 | 色鉛筆、段ボール
- OB-30 《無題 (魚とライフル銃)》制作年不明 | 色鉛筆、段ボール
- OB-31 《無題 (男女)》制作年不明 | 色鉛筆、段ボール
- OB-32 《家族》制作年不明 | 色鉛筆、段ボール
- OB-33 《無題 (男)》制作年不明 | 色鉛筆、段ボール
- OB-34 《無題 (海の生き物)》制作年不明 | 色鉛筆、段ボール
- OB-35 《無題 (男女)》制作年不明 | 色鉛筆、段ボール
- OB-36 《無題 (植物)》制作年不明 | 色鉛筆、段ボール
- OB-37 《無題 (だるま)》制作年不明 | 色鉛筆、段ボール
- OB-38 《無題 (軍艦)》制作年不明 | 色鉛筆、段ボール
- OB-39 《無題 (風景)》制作年不明 | 色鉛筆、段ボール

- OB-40 《無題 (男女)》制作年不明 | 色鉛筆、段ボール
- OB-41 《結婚式》制作年不明 | 色鉛筆、段ボール
- OB-42 《結婚》制作年不明 | 色鉛筆、段ボール
- OB-43 《無題 (男)》制作年不明 | 色鉛筆、段ボール
- OB-44 《無題 (男)》制作年不明 | 色鉛筆、段ボール
- OB-45 《無題 (建物)》制作年不明 | 色鉛筆、段ボール
- OB-46 《無題 (女)》制作年不明 | 色鉛筆、段ボール
- OB-47 《無題 (女)》制作年不明 | 色鉛筆、段ボール
- OB-48 《無題 (よける女)》制作年不明 | 色鉛筆、段ボール
- OB-49 《無題 (四角ふたつ)》制作年不明 | 色鉛筆、段ボール
- OB-50 《無題 (植物)》制作年不明 | 鉛筆、段ボール
- OB-51 《無題 (女)》制作年不明 | 色鉛筆、段ボール
- OB-52 《無題 (顔)》制作年不明 | 色鉛筆、段ボール
- OB-53 《無題 (女)》制作年不明 | 色鉛筆、段ボール
- OB-54 《無題 (魚)》裏面 | 制作年不明 | 色鉛筆、ボール紙
- OB-55 《結婚式》制作年不明 | 色鉛筆、段ボール
- OB-56 《結婚式》制作年不明 | 鉛筆、段ボール
- OB-57 《無題 (男)》制作年不明 | 色鉛筆、段ボール
- OB-58 《時計》制作年不明 | 色鉛筆、段ボール
- OB-59 《無題 (家族)》制作年不明 | 色鉛筆、段ボール
- OB-60 《結婚式》制作年不明 | 色鉛筆、段ボール
- OB-61 《結婚式》制作年不明 | 色鉛筆、段ボール
- OB-62 《結婚式》制作年不明 | 色鉛筆、段ボール

資料壁面

- OB-63 《浜口ツヤ子のお墓》制作年不明 | 色鉛筆、段ボール
- OB-64 《結婚式》制作年不明 | 鉛筆、段ボール
- OB-65 《ひこうき》制作年不明 | 鉛筆、紙



小幡正雄

OBATA Masao

1943 年生まれ、2010 年没。兵庫県。

1943 年 11 月 11 日に生まれた小幡正雄は、66 歳でこの世を去った。

中学 1 年生の時、両親の離婚を期に母と共に瀬戸内海の小さな島へ移り住み、物静かで消極的だった転校生は、のちに赤い服を全身に纏い、赤鉛筆で赤い絵を描く日々をおくった。そして、それらの絵は国内外の展覧会で注目を浴びることになった。抗えない苦勞を重ねたであろう彼の人生は、40 代半ばにひふみ園へ入所したところから風向きが変わっていった。厨房から野菜のシミがついた生臭いダンボールを拾ってきては自室に溜め込み、そのダンボールに絵を描き始めたのだ。描き始めたであろう頃から 3 年がたった時、美術家・東山嘉事氏に絵を見初められ、それまで焼却処分されていた絵は作品として保管されるようになった。その 3 年後には、当時兵庫県立近代美術館学芸員だった服部正氏に取り上げられ「アート・ナウ 98：ほとばしる表現力－アウトサイダー・アートの一断面」にて作品が紹介された。そしてその後、瞬く間に日本を代表するアウトサイダー / アール・ブリュットの作家として国内外の展覧会で作品が紹介されることとなった。

2010 年 66 歳の没後、彼の物語はそこで終わらなかった。1000 点以上もの遺作が行き場をなくし残され、それらを調査、整理し所有者を確定させるプロジェクトが始まったからである。身寄りのない彼の作品の身寄りを探すそのプロジェクトの調査記録は服部正氏により「小幡正雄の遺作について」（『国立新美術館研究紀要』第 5 号、2018 年）と題しまとめられた。

作品壁面

OB-01 《結婚式》制作年不明 | 色鉛筆、段ボール

OB-02 《無題（男）》制作年不明 | 色鉛筆、段ボール

OB-03 《無題（ピアノのある家）》制作年不明 | 色鉛筆、段ボール

OB-04 《無題（魚類）》制作年不明 | 色鉛筆、段ボール

OB-05 《無題（地図）》制作年不明 | 色鉛筆、段ボール

OB-06 《無題（男女）》制作年不明 | 色鉛筆、段ボール

OB-07 《無題（船）》制作年不明 | 色鉛筆、段ボール

OB-08 《無題（女）》制作年不明 | 色鉛筆、段ボール

OB-09 《無題（風景）》制作年不明 | 色鉛筆、段ボール

OB-10 《無題（男）》制作年不明 | 色鉛筆、段ボール

OB-11 《男》制作年不明 | 色鉛筆、段ボール